

仙台市文化財調査報告書第11集

昭和50年度

史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報

(西側墳麓及び周辺)

昭和51年3月

仙台市教育委員会

(遠見塚古墳調査概報正誤表)

ページ	行	誤	正
3	上 3	古墳の北東	北西
4	上 5	平面形	平面形
7	上16	周辺確認面からの深さは	周辺確認面から底面まで
8	上19	含むか	含むが
11	上17	周測	周溝
13	上28	Cロクロ使用	D

仙台市文化財調査報告書第11集

昭和50年度

史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報

(西側墳麓及び周辺)

昭和51年3月

仙台市教育委員会

例　　言

1. 本書は、仙台市遠見塚一丁目所在、国史跡遠見塚古墳の昭和50年度環境整備予備調査（西側墳體及び周辺部）の概要報告書である。
2. 本書の内容は、発掘調査の経過、学術的記録と若干の考察を含む。
3. 本文の執筆編集は岩渕康治が担当し、図面の作成等は岩渕、田中則和、結城慎一が行った。
なお、全体の監修は、伊東信雄（仙台市文化財保護委員）が行った。
4. 今回の調査に関しては、現地説明会資料を発行しているが、本報告の記載をもって優先するものと理解して頂きたい。
5. 今回の調査に関する追加、訂正事項などは、環境整備事業完了時における報告書において報告する。
6. 本調査に関する庶務、涉外などは、仙台市教育委員会社会教育課が担当した。

目 次

1.はじめに	1
2.古墳の位置の概要	2
3.調査内容	3
① 古墳西側の企みの原因と低い壇の実態について	4
② 岛邊の有無ならびに形態・規模について	7
③ 弥生式土器包含層について	11
④ 山土品について	11
イ 土器類	11
ロ 石器類	13
4.まとめと考察	14

写 真 目 次

写真1 遺見塚古墳周辺航空写真	1
写真2 封土削減以前の遺見塚古墳	3
写真3 遺見塚古墳現況航空写真	4
写真4 調査風景	7
写真5 第1トレント東端	7
写真6 第1トレント全景	7
写真7 第2トレント全景	8
写真8 第2トレント周辺内縁	8
写真9 第2トレント周辺外縁	8
写真10 第3トレント周辺内縁検出状況	8
写真11 第3トレント発掘状況	11
写真12 第3トレント遺物出土状況	11
写真13 出土品写真	15

挿 図 目 次

第1図 位置図	2
第2図 封土削減以前の遺見塚実測図	3
第3図 遺見塚古墳現況実測図およびトレント配置図	5・6
第4図 第3トレント断面図	9・10
第5図 出土品実測図	12
第6図 遺見塚古墳周辺図	17

I. はじめに

遠見塚古墳は、その規模において県内第2位、東北第3位、古墳の様式としては「柄鏡形」の前方後円墳といわれ、東北地方でも古型式のものとして古くから注目され、昭和43年11月8日には国の史跡に指定された。指定面積は、墳丘部分を中心とする16,547m²である。指定後、仙台市では国、県の補助を受けて土地の公有化に着手し、昭和43~48年度までに総額175,682,000円もって買収を完了した。

その後買収後の古墳の永久保存、管理のために仙台市では史跡環境整備事業を実施することとなり、昭和50年度より国、県の補助を受けて3カ年計画の予定で着手した。

整備事業の内容としては、①墳丘の破損部分の補修復原、②古墳保護柵の設置、③古墳周囲の景観整備、④説明板の設置、⑤古墳に関する基礎的資料の整備などである。昭和50年度の整備内容は、①環境整備基本設計委託、②古墳現況測量図の作成、③説明板の作成、④古墳周辺の雜物撤去、整備、⑤古墳周辺部の学術調査などであって、予算額は4,000,000円である。

遠見塚古墳に関する正式の発掘調査は從来一度も実施されたことがなく、今回が初めてであり、以下に述べるように貴重な学術的成果を納めることができた。



写真一

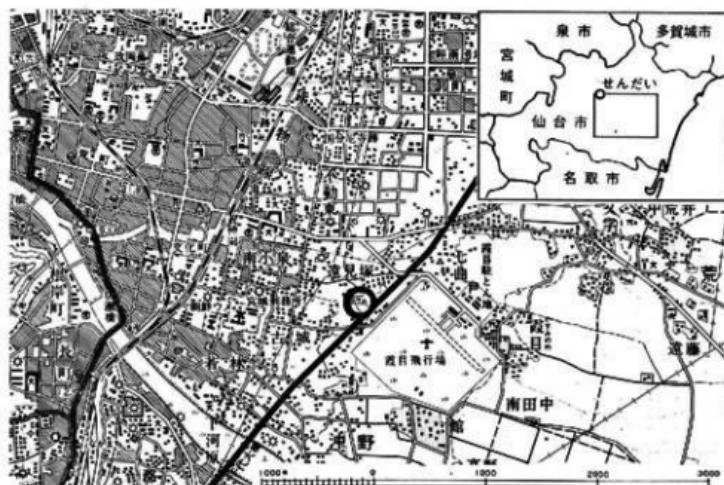
遠見塚古墳周辺航空写真(縮尺一萬二千五百分一 昭和四十六年撮影)

▽調査期間：昭和51年3月1日～3月19日
▽調査主体：仙台市教育委員会
▽調査指導：伊東信雄（仙台市文化財保護委員）
 氏家和典（宮城県多賀城跡調査研究所長）
▽調査担当：仙台市教育委員会社会教育課文化財係
 （社会教育課長）東海林恒英
 （文化財係長）佐藤　恂
 （主事）鈴木高文、岩渕康治、朝倉秀之、田中則和、門間美郎
 （嘱託）大泉重治
▽調査参加者：松浦邦幸、佐藤好正、高橋幸宏、庵口卓、斎藤秀寿、斎藤裕子、佐藤明美
▽調査協力：仙台市立遠見塚小学校
 株式会社萩野工務店
 宮城県教育庁文化財保護課
 育英学園高校郷土研究部

2. 古墳の位置と概要

遠見塚古墳は、仙台駅東南方3.7キロ、仙台市遠見塚一丁目にある、広瀬川北岸の発達した自然堤防上に位置する。古墳周辺は田地または畠地であるが、最近急速に市街化が進行してい

第一回 位置図（○印遠見塚古墳）



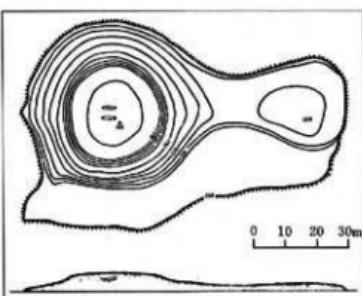
る。古墳の周辺には、弥生時代、古墳時代の大集落跡である南小泉遺跡の他、法領塚古墳、猪塚古墳などの古墳、古墳の北東1.5キロ付近に陸奥国分寺跡、国分尼寺跡などがあり、古墳周辺は市内でも史跡の豊富な地域として注目されている。

遠見塚古墳についての正式な発掘調査がなされたことは一度もないが、その存在は古くから知られ、藩政時代に書かれた『封内名跡志』、『封内風土記』などによれば、「遠望塚」「遠候塚」と呼ばれ、「古戦場」とか「伊達政宗が遠くを眺めわたした」などの説があったが、古墳との認識はなかったようである。明治以後、研究の進展によって古墳としての位置づけがなされるに至った。昭和22年に進駐軍の霞ノ日飛行場の整備のために土採りによって後円部の北半部が削除されて粘土嚢が出現した際、伊東信雄氏により本古墳に関する最初の調査が行われ、本古墳のみならず東北地方の古墳の編年研究にも重要な手がかりを与えることとなった。

それによれば、①古墳の長さは110m、後円部幅57m（復原62m）、前方部幅30m（復原38m）、高さ、後円部6.7m、前方部2.5m。②内部構造は、長軸に平行する粘土嚢が2個ある。③副葬品は土師器壺が一個発見されたのみである。④古墳の造営年代は、出土の土師器壺および群馬県稻荷山古墳との類似から考えて、西暦5世紀前後としている。



写真2 封土削減以前の遠見塚古墳
(「目で見る仙台の歴史」より転載)



第2図 封土削減以前の遠見塚実測図
(宮城県文化財調査報告書
第1集より)

3. 調査内容

今回の調査の目標は、従来不確定とされている古墳に関する基本的性格の解明である。すなわち、

- ①古墳西側に見られる低い壙の性格。
- ②実測図で観測される墳形の歪みの原因。
- ③周溝の有無、形態、規模の確認などである。

今回は、古墳西側を中心に3本のトレンチを設定、調査総面積は200m²に達した。

以下、問題点毎に調査内容を整理すると、

①古墳西側の歪みの原因と低い壇の実態について

遠見塚古墳は、現況測量図で観測した場合、終戦直後に進駐軍によって削除されたといわれる後円部北半部の状況を除いても、平面形の上で若干の歪みが認められ、左右対称とはならない。例えば後円部西側は墳體部の比較において東側がゆるやかな曲線をえがくに対しやや直線的である。接点部分は、西側においてくびれの状況が著しい。前方部では、最高点の位置が西側に偏している、などをあげることができる。古墳西側の低平な壇は、墳丘西側にのみ認められ、後円部付近では幅13m、接点部付近では幅23m、前方部では幅15mで、周辺の低地部分との比高は50~70cmである。壇の上面はほぼ低平である。昭和48年土地公有化以前は、墳丘部分および壇の部分は畠地として利用され、低地部分は田地として使用されていた。

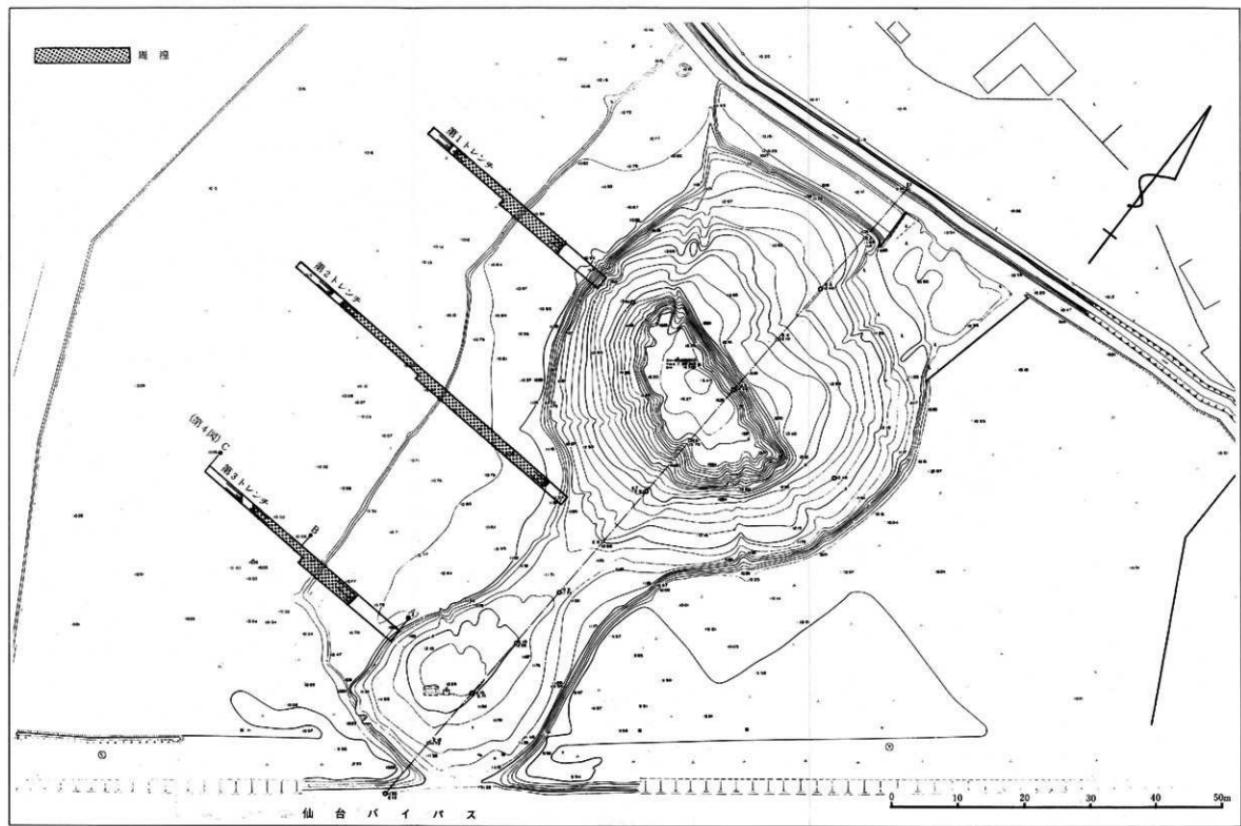
以上の状況について、伊東信雄氏は宮城県文化財調査報告書第1集報文中で、墳丘の西側を崩して低地を埋め、壇を形成したものとの推定をされている。今回の調査の結果は、壇を構成する土層中には最下部に達するまで近代の瀬戸物やガラス破片などが含まれ、土質もよく表土

写真3

遠見塚古墳現況航空写真（昭和46年 東南方向から撮影）



第3図 通見塙古墳群実測図およびトレンチ配置図



に類似しており、墳體部分は古墳基底部分まで擾乱されている状況が各トレンチにおいて確認され、伊東氏の推定を裏づける結果となった。ちなみに、墳丘および塚の部分での表土の厚さは50~80cmと厚く、低地部分では20~25cmであった。



なお、古墳基底部の高さについては、第1トレンチ旧表土面が海抜10.81m、第2トレンチ、第3トレンチではいずれも10.61mであり、墳丘最高点の、旧表土面からの高さは、後円部で5.60m、接点部で1.39m、前方部で1.78mである。

②周溝の有無ならびに形態、規模等について

周溝は、基本層序第3層（黄褐色シルト層）面でその輪郭をとらえることができた。各トレンチの状況を見ると、第1トレンチでは、内縁は現墳體から6.0m西、外縁は内縁から21.4m西に発見された。（すなわち周溝幅である。）内縁部での周溝確認面からの深さは60cm（旧表土面から146cm）、外縁では80cm（186cm）、内縁から13m西のトレンチ中央部での深さは1.7m（2.6m）余で、ほぼ舟底形を呈するものと見られる。

第2トレンチでは、内縁は、現墳體から2.0~2.5m西で、トレンチ北壁付近で西側へ曲折している状況が認められた。外縁は、内縁から41.2m、



写真5 第一トレンチ東端（後円部西墳體）

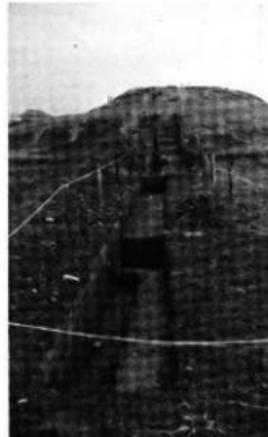


写真6 第一トレンチ全景（西から撮影）

写真7

第2トレンチ全景

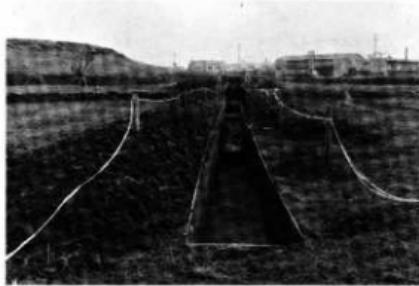


写真8 第2トレンチ周溝内縁

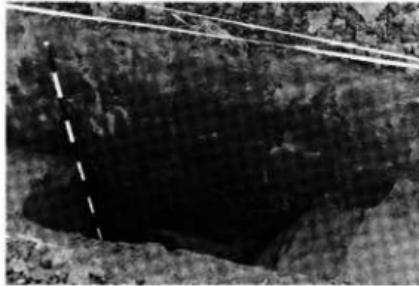
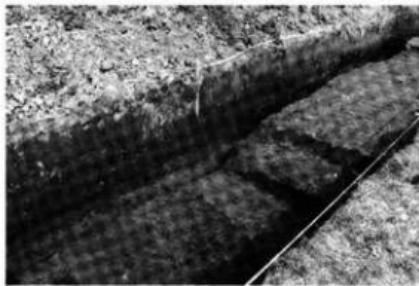


写真9 第2トレンチ周溝外縁



写真10 第3トレンチ周溝内縁検出状況



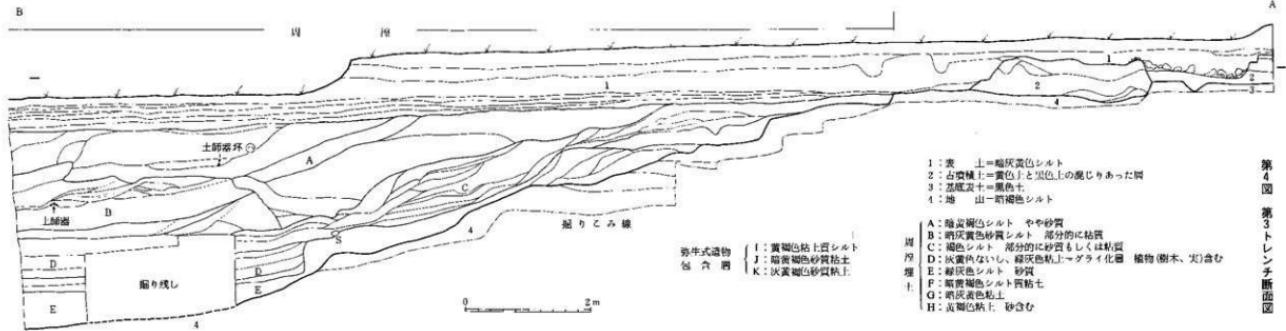
内縁部での深さは1.1m（旧表土からは1.3m）、外縁部では80cm（1.6m）。トレンチ東端から15m西の部分では3.0m（3.6m）である。断面形態はほぼ舟底形を呈するものだろう。

第3トレンチでは、内縁は現噴氷から7.8m、外縁は内縁から20.0～20.7m、内縁部での深さは80cm（旧表土面から1.7m）、外縁部では1.25m（2.0m）、トレンチ東端から18.5m西の部分での深さは3.5m（4.3m）で、断面形態は舟底形を呈する。周溝の底面は、両縁部ではシルト層であるが、中央部に移行するにつれ、次第に粘質となり、最深部付近では堅固な砂礫層となっている。〔疊径2cm未満〕周溝の埋土も、間に薄く砂礫層を含むか、おおむねシルト質土となっているが、周溝中央部付近では、底面から1.2mくらいまでが緑灰色のグラウイ化された砂質粘土となっており、樹木片、木の葉およびクリなどの木の実類が多量含まれている。

以上を総合してみると、平面的には周溝の内縁はほぼ填丘に沿うが、外縁はほぼ直線的な様相であると推定することができる。周溝の断面はほぼ一様に舟底形を呈する。

なお、深さは今回の調査時の周溝検出面からの数値だが、検出面

A



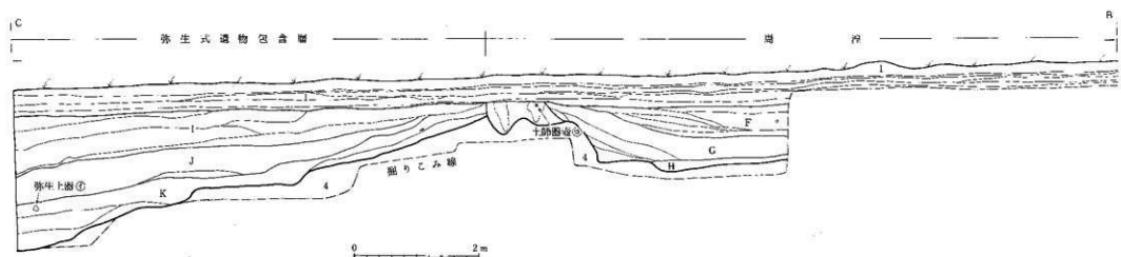
第4回 第3トレンチ断面図

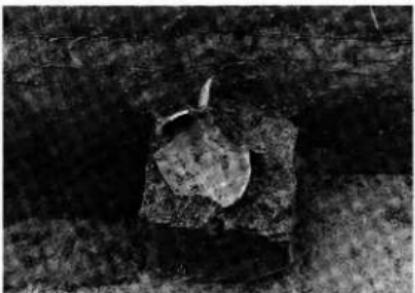
- 1: 来
上=黄灰褐色シルト
- 2: 占
地=黄褐色シルトと黒色上の既じりあった層
- 3: 黒
底=黒土=黒色土
- 4: 地
山=暗褐色シルト

鳥牛式遺物
包含層

I: 黄褐色粘土質シルト
J: 黄褐色砂質粘土
K: 暗褐色砂質粘土

- A: 黄灰褐色シルト やや砂質
- B: 暗灰褐色砂質シルト 部分的に粘質
- C: 細いシルト 局部分的に砂質もしくは粘質
- 泥
泥質のない、いわゆる灰色粘土→グラウバウム 植物(樹木、実)含む
- E: 黄灰褐色シルト 砂質
- F: 黄灰褐色シルト 砂質
- G: 黄灰褐色シルト 砂質
- H: 黄褐色粘土 砂含む
- I: 黄褐色粘土質シルト
- J: 黄褐色砂質粘土
- K: 暗褐色砂質粘土
- L: 黄褐色粘土 砂含む





が擾乱などによって本来の古墳の基底面よりも50cm前後下がっているので、本来の深さはさらに深いものと考えるべきであろう。また、周辺の埋土中から弥生土器、石器、土師器などが発見されたが、特に底面付近では南小泉式土師器が発見された。

③弥生式土器包含層について

周辺の外縁からさらに1~2m西側で、西側へのびる落ちこみの輪郭が確認された。このおちこみは各トレンチで認められたが、第3トレンチの場合は、深さ最大2.1mで、断面はやはり舟底形を呈する模様である。この場合注意すべ

きは、その埋土が周測によって切られていることで、従って、周辺築造以前にあった落ちこみということになる。しかも、この落ちこみからの多量の出土遺物は、すべて弥生式土器、石器類で、土師器などの古墳築造以後の遺物は全く含まれていない。従ってこれらの落ちこみは、古墳築造以前の弥生式時代の遺物包含層であろうと考えられる。

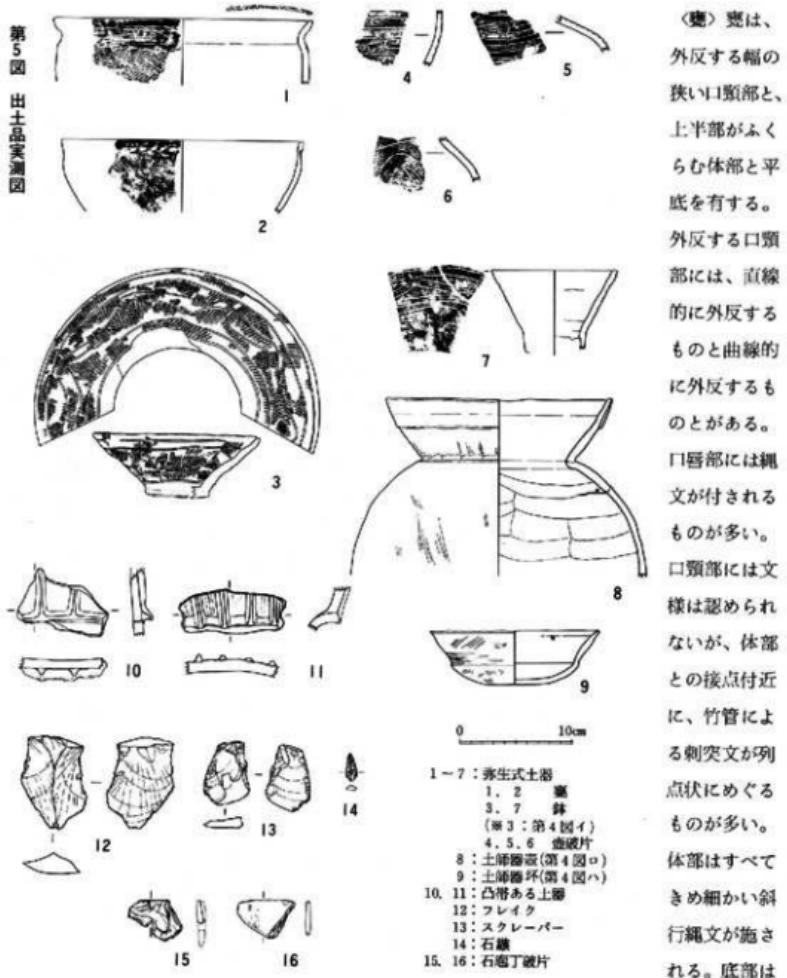
④出土品について

今回の調査で出土した遺物の総量はダンボール箱（ミカン箱）で4箱分である。出土部位としては、弥生式土器包含層からの出土量が最も多く、その他、墳丘積土や旧表土中からの遺物の出土もよく目立った。周辺埋土からの出土量は比較的少なかった。種別としては、9割が土器類で、内、弥生式土器が最も多く全体の半分を占める。残りのはほとんどは、土師器（ロクロ不使用）である。土器類以外には石器類がある。

イ. 土器類

A. 弥生式土器（第5回1~7、写真13-1, 2, 6）

小破片が多く、完形もしくは器形のわかるものは少ない。器形のわかるものとしては、壺、鉢、盃がある。いずれもロクロの使用は認められない。ほとんどがきめの細かい繩文を有する。



小さく、直径は口縁部の十くらいで、木の葉文様のあるものが多い。器厚は4mm前後で、底部が炎を受けているものがある。

〈鉢〉 鉢同様底部が小さく、口縁部に行くに従い外反する器形のものである。体部と口縁部の区別はつかない。全般に高さが低く、口径が高さよりも大きいものが多い。底部から体部下半へかけて、垂直に立ちあがった後外反するものと、ほぼ直線的に外反するものがある。前者

のものは、蓋と見ることもできる。口唇部は、平縁のものが多い。文様は、体部下半が細かい斜行構文、体部上半は、半截竹管沈線と擦消繩文による変形工字文や山形文などが俗状にめぐる。器厚は5~6mm前後と薄手のものが多い。布痕を有する底部破片が1点発見された。(写真13-6)

〈壺〉完形品はないので各部の特長を記すと、口頸部は比較的短く、かつ最大径は体部上半にある平底のものである。口頸部のないものもある。文様帶は体部上半に集中し、細い竹管沈線と擦消繩文によって構成され、渦状文や変形工字文、いかり形文様も認められる。朱塗りの破片が若干含まれる。

以上の弥生式土器の型式は、大泉式、瓣形圓式、桜井式などである。

B. 土師器（ロクロ不使用のもの）（第5図-8、9、写真13-3、4）

土師器も、完形品や一括土器は稀少だが、器形のわかるものとしては壺、壺などがある。弥生式土器に比べ胎土、焼成とも良好である。文様はほとんどなく、調整の際の刷毛印などが認められる。

〈壺〉図5-8は、体部下半が失われているが口縁部は斜め上方に直線的に立ちあがり、口部直徑20.2cm、口頸部直徑13.6cm、高さ5.4cmである。口唇部は折り返し口縁となっている。底部は欠失していて不明だが、ほぼ球形を呈すると見られる体部の直徑は26.4cm、現存の高さは11.5cmである。「南小泉式土器」に該当する。

〈壺〉丸底で、体部と底部の間に内外面で曲折および稜を有する。全体に磨滅が著しいが内面は黒色処理が施されている。外面は、底部は削りがあり、体部ないし口縁部はナデ調整が施され、「葉團式」の範囲うに属する土器である。

量的には、壺の破片と考えられるものが多数を占める。

C. 凸帶ある土器（第5図10、11、写真13-3、4）

第2トレンチ、第3トレンチの周辺内縁付近の埴上最上層上面から合計3点出土した。色調は明黄褐色で、焼成良好でやや固い。いずれも小破片となっていて全形の復原が困難であり、また、いかなる部位の破片のかも見当がつかない。土器の外面に、幅10mmほどの凸帶が横に一本、そして、縦に8mmほどのものが一定間隔にめぐる。裏面には横ハケが施されている。色調、焼成などは、やや埴輪に類似する面もあるが、器厚は7~10mmほどで薄手である。図5-11は外面に朱が塗布された形跡がある。

C. ロクロ使用による土器（土師器、須恵器）

これらの土器は量的にはきわめて少なく、それぞれ数点ずつ出土した。回転糸切底の破片も見られる

D. 石器類（第5図12~16、写真13-7~9）

石器類のほとんどはフレイク（剝片=使用痕あるものを含む）もしくは不定形石器で、定形

の石器としては石鏃が1点、石庖丁破片が2点であり、ほかにコア（石核）が4点ほどある。石質は様々であるが、最も多いのが頁岩、次いでチャート（珪岩）、黒曜石、粘板岩などとなっている。

A. フレイク（剝片）

フレイクは、大形のものでは長さ8cm前後、小形のものでは2cmくらいで、プラットフォーム（打面）、バルブ（打觸）、リング（U字状打裂痕）、フィッシャー（ヒゲ状打裂痕）などを明瞭に示しているものが多い。中には、リタッチ（二次剝離）や使用痕を有するものもかなりあり、石器として使用されたものが多いことを物語る。弥生式土器遺物包含層から多数出土しているので弥生時代に属するものが多いと思われる。

B. 石 鏃

有茎の鏃であるが基部が破損している。全体に、ていねいな剥離痕がおよんでいる。材質は灰褐色の頁岩である。

C. スクレーバー（搔器）

フレイクの側縁の両面にリタッチが加えられた、いわゆるサイドスクレーバーである。材質は、軟質の頁岩で長さ5.9cm、幅4.1cm、厚さ9mmである。

D. 石庖丁

弥生式土器遺物包含層から出土した。いずれも小破片で、一点は先端部、一点は中央紐掛孔付近の破片である。いずれも粘板岩製である。

4.まとめと考察

今回の調査は、古墳周縁を中心に実施された。きわめて限定された範囲の調査ではあったが、古墳の基本的あり方に因するいくつかのきわめて重要な事実が明らかとなった。

①古墳の形態および規模については、特に古墳西側の壇の性格が問題であったが、従来から推定されてきたように、この壇は近代にはいって古墳西側壇壇籬を崩して、形成されたものであることが明らかとなった。従って、古墳の築造当初の形態および規模は、現状とは若干異なるものであることが明らかとなった。以上まとめると、

主軸長 107m = 現状

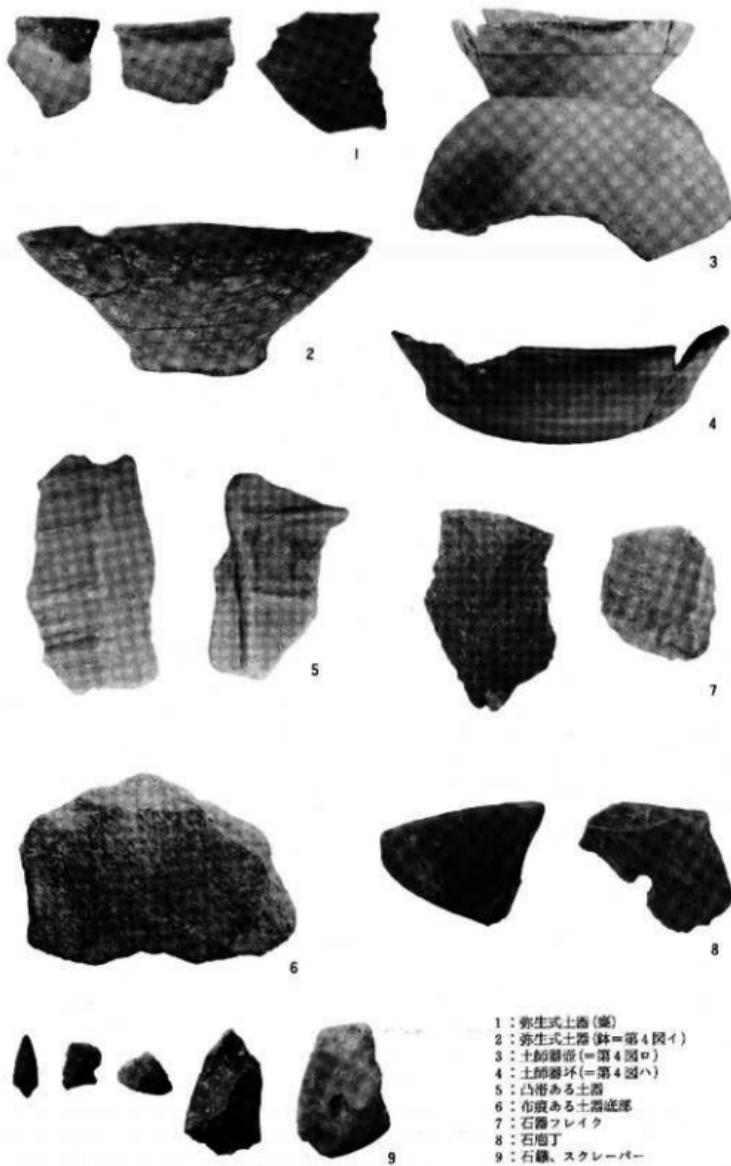
後円部直径 61.5m (推定) ※現状 55m

前方部幅 35m (推定) ※現状 28m

接点部幅 22.5m (推定) ※現状 20m

基底部からの高さ (後円部) 5.6m、(接点部) 1.4m、(前方部) 1.8m

以上から当初の形態を考えてみると、前方部が現状よりは幅広いものであると考えられ、従来いわれてきた“納鏡形”とは異った様相を呈するようである。ただ、以上の数値は、西側の



1: 弓生式土器(底)
 2: 弓生式土器(鉢=第4図イ)
 3: 土師器底(=第4図ロ)
 4: 土師器底(=第4図ハ)
 5: 凸筋ある土器
 6: 布痕ある土器底部
 7: 石器フレイク
 8: 石削丁
 9: 石鏃、スクレーパー

調査結果による推定値であり、今後、他の部分の調査結果によっては、若干の変動を生じる余地をもつものである。

②今回の調査で、予想以上の大規模な周溝の存在が確認されたことも一つの重要な成果といえる。その形態や規模については、限られた範囲の調査であるため、やはり推定的様相を含むことを免れられないが、平面形態は馬蹄形、幅は後円部、前方部ではそれぞれ、21m、20m、接点部では41mとなっている。断面形態は、縁辺から一定の傾斜をもっておちこみ中火部で最も深くなる、いわゆる舟底形の形態をとる。深さは、第1トレンチ以外で最高4m前後に達することを確認した。

遠見塚古墳では、従来、航空写真、赤外線写真などによって、周溝の状況を探る試みがなされたことがあったが、明確な成果がえられなかった。これは、周溝の埋土および地山を構成する土質がともにシルト質土で類似していたためと解釈される。いずれにしろ、このような大規模な周溝が確認されるのは、県内はもちろん、東北でも初めてのことであり、古墳築造にあたっての膨大な土木工事を推測させるに十分なものである。

③出土遺物では、弥生式時代の遺物が圧倒的に多く見られた。これは、第3トレンチなどで明確に確認されたように、古墳の周辺に濃密な弥生式遺物包含層があり、古墳がそれらを部分的に破壊して作られたためであった。発見された遺物では、完形品や一括出土品は少なく、ほとんどが小破片であった。出土地点では、周溝内よりは周溝外および填土積土中から発見される場合が多く、周溝内においては埋土下部からの出土量は少なく、上部からの出土量が多かった。こうした中で注意すべき点をあげると、

イ、弥生式時代の遺物としては、土器では大泉式、柳形圓式、桜井式と東北地方弥生時代初期～後期に至るまで一貫して発見されること。

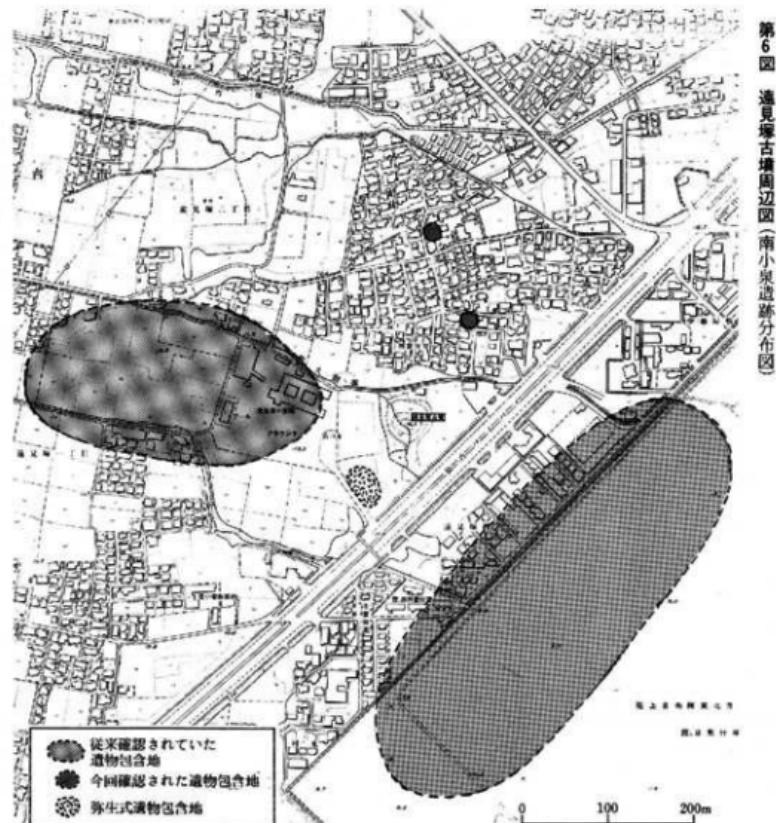
ロ、石器では、定形石器がきわめて少なく、フレイクをそのまま使用した感じのものが多く見られた。石質では頁岩、珪岩が多かった。

ハ、今回の出土品中で特異なのは凸縁ある土器であり、色調、焼成などの点では埴輪的な様相も認められるが、器厚の薄い点や凸縁の形状などから見ると土師器に類したものと考えるべきであろう。

ニ、周溝底面、特に縁辺付近において南小泉式土師器が一括状態で発見されることがあるが、本古墳の築造時期に最も近い遺物といえよう。

④遠見塚古墳と密接な関連を有する遺跡として南小泉遺跡があるが、この遺跡については東北でも屈指の規模の集落遺跡といわれながらその実態は必ずしも明確でない。第一にはその分布範囲が不明確である。従来遺跡部分として認められてきているのは、昭和10年代に慶喜飛行場拡張工事が実施された折り多くの出土品が発見された古墳東部地域と、古墳西側の現遠見塚

学校を中心とする周辺の畠地が遺跡該当地域として指摘されてきた。ところが、今回の調査中に古墳の北側約100mほどの地点で宅地内の畠地の天地返し作業中に弥生式土器および土師器の遺物包含層が発見され、古墳北側も遺跡範囲に含まれることが明らかとなった。南方は、現在バイパスおよび宅地となって確認するすべがないが、遠見塚古墳をとり囲むような形で当時の集落が形成されていたことが推測される。



〈参考文献〉

- 伊東信雄「越見塚古墳」(『宮城県文化財調査報告書』、1950)
伊東信雄「仙台市内の古代遺跡」(『仙台市史 3』、1950)
伊東信雄「古代史」(『宮城県史 1』、1957)
仙台市史図録編纂委員会編「目で見る仙台の歴史」(1959)
仙台市教育委員会「仙台の文化財」(1970)
伊藤玄三「五世紀の古墳」(『古代の日本 8・東北』1970)

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物雪屋下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集 仙台城（昭和42年3月）
第3集 仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集 仙台市荒巻五本松窓跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集 仙台市宮沢裏町内古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集 仙台市柳平町宗神寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）

仙台市文化財調査報告書第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報

昭和51年3月発行
発行 仙台市教育委員会
仙台市墨田町3-7-1
仙台市教育委員会社会教育課
印刷 株式会社 東北プリント
仙台市立町24-24 TEL(25)6466(代)



株式会社シーホームワーク